

The Relationship Between the Competition Level and Achievement Goals of University
Softball Athletes

1K07A244-1

指導教員 主査 堀野博幸先生

渡邊敦子

副査 正木宏明先生

序論

近年、体育・スポーツにおける動機づけに関する研究において、達成目標理論(achievement goal theory)が注目されるようになってきており、達成目標は体育・スポーツ場面の動機づけに重要な意味を持つといわれている。これまでの研究で達成目標は「熟達目標」と「成績目標」の二つに分けられており、伊藤 (1996) は熟達目標を持つことはスポーツの動機づけに適していることを明らかにした。しかし、これまでの研究では達成目標と競技成績との関係は明らかにされていないとされている。そこで本研究では、大学のソフトボール選手を対象に、達成目標と競技成績との関係を「熟達目標」と「成績目標」の比較を通じ明らかにする。

方法

対象者は、東京都女子一部リーグに属する6つの大学(学習院大学・国士舘大学・東京女子体育大学・日本体育大学・日本女子体育大学・早稲田大学)の体育会ソフトボール部に所属している197名である。また、学習院大学・国士舘大学・早稲田大学においては男子ソフトボール部員の協力も得ることができた。したがって、本研究での調査人数は男性59名、女性197名の計256名である。対象者には2010年10月9日に行われた東京都秋季リーグ戦にて大学の代表者にアンケートを配布し、約一週間後に回収した。アンケートは、先行研究で使用された項目を参考にし、熟達目標と成績目標に関する52項目で構成されている。そして、対象者を競技成績のレベル別にトップ群・準トップ群・ノーマル群の3群に分け、分析(因子分析・多重比較)を行った。他にも性別でのt検定やポジション別での多重比較も行った。

結果

因子分析の結果、先行研究と同じ二つの因子が見つかり、熟達目標と成績目標と命名した。また、一番差が出ると思われるトップ群とノーマル群においてそれぞれ因子分析を行ったところ、因子負荷量の数値が

ら、トップ群はノーマル群に比べて熟達目標の認知が高いことが分かった。また、ノーマル群はトップ群に比べて成績目標の認知が高いことも分かった。また、3群で多重比較を行った結果、トップ群は他の2群に比べて熟達目標の認知において有意差が認められた。次に性別でt検定、ポジション別で多重比較を行ったが有意差が認められなかった。

考察

因子負荷量の数値の比較と多重比較の結果からトップ群の選手が熟達目標を強く認知していることが分かった。これはトップ群の選手は自分の実力向上を楽しみ、競技に取り組んでいるため、常に前向きにプレーすることができる。そのため、高い競技成績を残しているものと考えられる。それに対しノーマル群の選手は成績目標を強く認知し、常に周りの評価を気にしながらプレーしているため自分のプレーに集中できていないということから競技成績を残すことができないということが考えられる。また、性別での比較では有意差が認められなかった。これは性別の人数比の違いが大きすぎたため結果が出なかったと考えられる。またポジション別での比較でも有意差が認められなかった。バッテリー群には、投手と捕手という異なるポジションの役割が存在する。今後はポジション的役割を考慮し、さらに検討することが課題となる。

本研究で、達成目標と競技成績との関係が明らかになり、大学ソフトボール選手において達成目標の動機づけだけでなく、競技成績にも影響を与えるということが分かった。また最近の研究では個人が持つ達成目標だけでなく、個人を取り巻くチームの雰囲気も重要だということが明らかになっている(伊藤・磯貝・西田・佐々木・杉山・渋谷, 2008)。競技成績と動機づけに有効とされる熟達目標の認知をチームの雰囲気から作り出すことができれば、個人が持つ達成目標にも影響を与え、より高い競技成績を残すことができるようになるだろう。今後は、選手が熟達目標を認知できるようなチームによる雰囲気作りが課題となる。